

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年八月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第七十七号)

慈

光

目

常音先生隨聞私記……………吉田延世…(1)

果遂之誓良くわすいのちかしまことに由有ゆえある哉……………花田正夫…(5)

ありそなこと……………池山榮吉…(9)

第七卷

第八號

常音先生隨聞私記

吉田延世

註。八月六日の近角常音先生の三週忌をお迎へ申すにつき、先生の求道会館での御講話のうち吉田様が深く感銘されましたところを筆録して居られた原稿を頂き、先生の德音に浴したいと思ひ、謹んで掲載させて頂きます。もとより文責は編者にあります。花田

懺悔と感謝

我慢のかたまりが人間、即ちこの私である。然るに修養によつて無我になるの、悟りをうるのと、あゝの、かうのと、うまくやれるものと思ひ、我慢を出してやつてゐる。このために、己を害し、人を害し、自他共に害してゐるのである。それでゐて、今によくゐると思ひながら死なねばならぬ身である。しかも死なぬと我慢を張り通してゐる。

落ちて行くことを恐れ、うまいことをやらう、よくならねばととなるけれど、これではならぬと亦失敗す

思うて下さるのである。

小出さんは二度までも脳溢血となり、近來は盲目とならねばならぬといふ、淋しき、みじめな身の上となり、その間、人事種々と手違を來たし、あゝのかうのと愚痴すれども、思ふやうにならぬのである。

盲目になつても、生命ばかりはと思ふけれども、それも覺束ない情けない身で、大慈ましますば一時たりとも生きて居られぬ。唯何処へまでも御見捨てない御真実をたよつて、どうならうと御見捨てないお慈悲にまかせ奉るばかりなりとの御話であつた。

昭和十五年 五月五日、謹録。

易往無人之淨信

十年の間、如何に聞き、經文を読むも、一念真心徹到するところなく、心暗く、心ひらけず、一心をいただき、火を点するところなくば、どうも任せて見やうがないのである。自分自身が行き詰り砕けるより外はない。此処が砕けて任せて見やうのないところへ、地獄の苦惱ばかりのところへ、それが可哀想であるとの御見捨てないお慈悲が有難いのである。

凡夫の常で、初めは教を聞き心が樂になれば、何時の間

る。斯うしたことを何時までも繰り返してやまぬ者だから、落ちることを心配するな、砕けることが氣の毒なる故に、どこどこまでも見せてぬ、それを心配するな、落ちるならば自分も、仏も一緒に落ちるぞといふ大悲大願である。

人生この真実の本願ばかりでやらせて頂くのである。自分の意見や思惑は、何も彼も間に合はぬのであるから、あかかうと言つても何ともならぬと諦められる。それは仏のお慈悲を戴いたからである。

法然上人ありて始めて念仏を称へるものとなつたので、元來人間は、そんな念仏を称へることは絶対不可能のことである。故に宗門の大切なことを思ひ、そのために愛山護法と一生求道を世に宣布してゐるのである。

次第に悪くなつてゆく此の身を、斯うして亡んで行くこの身を、可哀想と思ひ、悪く思はぬ、見すてぬ、氣の毒に

にか仏様に用がない様になる。又一家が繁昌し、金が儲かるやうになれば、もう仏は要らぬやうになる。

このやうになる人が多いが、よき人の仰せを素直にただ信するばかりである。人生間に合はうが、間に合ふまいが、此世とは全く違ふ仏智仏愛をいただくにはあられな

五濁惡時惡世界の惡さにしみついてをり、火宅の世にあつて、毎日よいの悪いのと血みちをあけてゐる虚仮誑欺のこのわが身、地獄に落ちるより外ない此の身に向つて、清淨真実のお慈悲を与へ給ふのである。ここを信するのである。云々。

人生と無我

生につき、死につき、お見捨てなき御手引を蒙るばかりである。

そこをわからうと如何に生命がけに聴聞しても解らない、これは如来の加威力によるのである。広大なお慈悲、御廻向により、たまに信を獲させられるのである。

大谷信徒の代表とまで云はれた横浜の前田老人のお話で

あるが、或日「極楽参りのことでやかましく信心のことを言ふ近角常観といふ男を知らぬでは……」と、はれがましいことを思つて、本郷の、求道会館を訪ね、兄貴に会ひに来て、別に信心のことを聞くのでもなく、

「近頃、慶ぶの慶ばぬのと人々は血みちをあけて居るけれども、自分はちつとも感じなくなつた、これは極楽を通り過しているのぢやらう云云」

と。するとそれまで黙つて聞いてゐた兄貴が

「あんたはチツトも仏のお慈悲を戴いて居らぬ」

と答へ、その場はそのまま老人は帰つて行つたが、さてそれが夜ともなれば、妙にその言葉が気にかかり、ねむられず、遂には仏様を碎いて了ふなどと、やけになり狂人の如くになつた。

「六十年間、慶ぶの慶ばぬの、わかつたの、わからぬのと、この年まで一生棒に振つてしまつた。一代聞いて来たが何の得るところなく、自分の今までの信仰は碎けてしまつた……」

○
「こちらの思惑で、煩惱で造つた仏様は碎けて了ふのが当然である。

ここをもつて、この煩惱の本性を見抜いて、それが憐れであるとの広大な、限りのない御真実である、この心顛倒せず、この心虚偽ならずである。こちらは如何に碎けよう

と云つて息を引きとつた。

○
会館によく来られた人で米沢さんと云ふ方があつたが、この人は肺を永年わづらひ、幾度も死にかかり、死にかかり、遂に臨終になつたが、その時の遺言に

「必ず皆をお護りする」

と。前田老人と云ひ、この米沢さんと云ひ、二人とも還相廻向を信じて逝かれた人々である。

○
人間相互同志では救はれん。ただ真実の救ひは弥陀ばかりである。皆一人／＼信心を戴いてたすかるのである。仏心の御手引きを蒙り往相還相の廻向を頂く。これが自然法爾である。云々。

昭和十五年五月二十六日。謹録

如実修行相應

○
諸の難行難修自力の心をふりすてて、一心に阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみ申して候、と蓮如上人がお勧め下さる。

○
一心は金剛心、金剛心は菩提心。

○
不平不足の心ばかりの我々である。広大な如来のおめぐ

が、たとひどうならうが、この大慈大悲の御真実ひとつである。

○
前田老人は、大震災の時妻を失ひ、孤独となり、子供もなく、お詣りの時電車に腰を打たれて、腰が立たぬやうになり、誰も世話をしてくれず、心細くなつて狂人のやうになることが一日に一度はあるといふ。

そして思ひ狂つた挙句に

○
「一代信心心と本山に血みちを挙げた、そのなれの果ては、かくの如くであるか……」

さて、さて。この限りの業を知らず、今までの南無阿弥陀仏の聞き方が足りなかつた……」

と懺悔の涙を流してゐた。

○
この前田老人に一人の養子があつたが、それは震災の時隣家に生れた赤坊の泣声を聞いて目をさまし、それがたまらなくいとほしく、愛着を感じ、翌日遂にその子の親にねだつて養子とし、全財産を傾けて養育もし、学校も出したが、前田老人いよく病篤く、その子に遺言して曰く

○
「お前は五分借金も出来てゐるが、還相廻向により、わしが死んだのちに皆返してやるから安心せよ。借金のことには心配するな。ただ一つ喃、本郷の近角先生に南無阿弥陀仏の由来を聞きなさいよ」

○
みをおくといふものの、いのちとたのむ己が心をよくしよう、善くせねばならぬ、さういふ思ひがつきまとうのであるが、こんな諸々の難行難修の自力の心をふりすてるのである。

○
「いづれの行も及び難き身なれば」とある。今までの神に祈つたり、坐禅したり、祈謝をしても、人生は思ふやうにはならぬ。

○
精神一到何事か成らざらん種々やるけれども、皆碎けるし、平和、平和と願ひながら修羅を現じ、如何ほどやつても流転してゆくこの世である。一点のひかりなきこの世である。

○
この暗黒な世界に、一点の光明なきわれ／＼の心に、和やかな慈悲のひかりをめぐみ給ふのである。これが唯一のこの世での希望のひかりである。

○
「ふりすてる」といふのは、一心一向に阿弥陀如来を信じ、そのおたすけをたのみ奉るのである。

○
陽が登つて、初めて闇黒が明るくなる如く、己が闇黒な罪悪感からは信仰は生れない。大悲が到りとどいて初めて己が罪悪のほどがわかつて来るのである。

自分では我慢のかたまりでありながら、我慢を出してない、よくやつて居る積りで居つた。そこへ兄貴が『我慢のやまぬのが可哀想である、困つたものだ』と何時も気にかけて問題にしてくれてゐると伝へきいたのである。

これは思ひもかけぬことである、こんなやくざ者は誰も呆れて問題にせぬのが当然である。これは有難いと思つて

果遂の誓、良に由有る哉

花田正夫

觀無量壽經の至極は「極重惡人、唯稱仏」であり、阿彌陀經の肝要は「執持名号」に極まることは衆知のことでありませぬ。

法然上人は御自らの信心の上から「現世をすぐべき様は、念仏申されん様にすぐべし」とも勸められ、又は「衣食住の三つは念仏の助業なり」とも仰せられてゐますが、この御勧めを、文字通りに形式的、律法的に実行せられた

方があります。

岐阜県の谷波に現在居られるSさんがその人でありませぬ。終戦後に現在の所に家を建てられたのでありますが、まだ電灯も来ない隣りに家のない場所を選ばれたのも高声念仏を日夜に相續されるについて障害が尠ないやうにと願はれたのでした。

又名古屋駅前の某所に勤務せられるについても、収入がすくないことを承知の上に夜勤を志願せられたのは、法縁を多く結び、開法を続けたいとの一心からでありました。

勤務中も始終念仏申されてゐて、他所から電話でもかゝつて来ると、話を聞く時は、こちらの送話口を手掌でふさいで念仏を続けられた由であります。

谷波から名駅までの通勤の電車中も、高声念仏を絶たれないので、時に念仏きらひの人々からヒドイ目にも遭はされたこともあり、時には種々の人々か、好奇心からあれこれと話しかけられることも多いので、厚紙の裏に「話かけないで念仏させて下さい」といふことを書いて、返事のはりにそれを差し出して居られました。

こんな調子なので勤務先でも「念仏をやめないと辞職して貰ふかどうか」と責められたこともあるようですが「念仏が相續出来ないならやむを得ません、退職させて頂きませぬ」と真面目に答へられたので「お前は頭がドウカしてゐるのか。辞めると妻子が飢えるではないか」と重ねて聞かれて「ハイさうかも知れませぬ」と押し問答をせられたこともあつたさうです。

斯うして、何年も「念仏念仏で歳月を送り迎へられたのでありますが、そのうちに、Sさんより先輩で、心境も立派で、Sさんがひそかに、あの人の様になりたいと私淑してゐた同行の数人が、人生問題の大きな出来事に出遭は

我身を振りかへつた時、よくやつてゐると思つてゐたことがすべて我慢であると知らされて、いよ／＼そこを見抜いて可哀想と云はれる、その兄貴の言葉そのまゝが如来聖人のおまことであるとしらされた。南無阿彌陀仏。如来のお慈悲を知らされなければ、如何なる人といへども、己が悪さがわかる筈もない。云々。

昭和十五年六月二日謹録。

れると、ポツリ／＼と次から次へ落伍せられるのを見られたのであります。

あれほど熱心に、そして盛んに念仏して居られたのにと思ふ人が、事業に失敗して不義理が重なるといふ様な破目に出遭ふと、パツタリ念仏から遠ざかつて了ふと云ふ始末でした。然しさうした人々を他人事として眺めてゐた間はまだよかつたのですが、フト我身を省みられた時

「あの人達は、山で言へば、八合目、九合目も登つてゐたのに、惜しいことにはアツト言ふ間に下り落ちて行かれた。さて自分は、あの人達よりも遙かに手前に居る、然し斯うして努めて居れば何時かはその人達の場所まで到達出来るであらうが、悲しいことには、たとへ其処まで登り帰っても、自分も亦何かの縁で退転し、没落するに違ひないことである。」

と知れた時、全く愕然として、あたかも出水で堤防が崩壊して、一面の濁水で、家も田も畑も、すっかり駄目になつた様に、生涯をかけて努め励んで来た念仏の生活がメチャ／＼に碎け去つたのであります。

其処に到つて、Sさんの生活は、ウもスもない、只ウロ／＼とろろづくばかりとなられ

「忙々たる恨には渡に船を失ふがごとし。朦々たる憂には闇に道を迷ふがごとし云々」

の法然上人四十三歳の御悲歎の片鱗に触れられたのであります。その時、不思議な御縁から慈光誡を讀まれ「他力自然の念仏、念佛申し候でなく、念佛も申され候」の消息に驚かれて、走せて草庵に来られたのであります。

然し、玄関が開くと共に、Sさんの高声の念佛は家中にひびきました。あとでのSさんの告白によりますと、自力の念佛のむなしさは知れたけれども、他力の光明はあらはれず、溺れる者が藁にもしがみつくやうに、只々無暗矢鱈にお念佛にすがりついて居られたのださうでありました。

御佛間にお迎へして、一部始終のお話を承りました時、私はそのSさんのお姿をどうして、廿九歳の祖聖が、叡山にとどまることが出来なくなられて、吉水の法然上人の禪室にコログダ込まれずには居られなかつた御心事を想ひ浮べ、覚えず眼頭が熱くなりました。

聖人の御裏方の恵信尼公文書にあります通り、聖人は叡山の常行三味堂で、堂僧をして居られたのであります。三味堂は弥陀如来を安置し奉つて、念佛三昧で行道をせられるのであります。その間、聖人は源信僧都の往生要集も、善導大師の御釈も、すでに叡山で読まれて居たと推定されます。それは次の二首

に称へ〜て、しかも空しく崩れる。称へる自由は興へられながらも、それが駄目なことで知れては、たまつたものではありません、全く底知れぬ大暗黒に崩れ落ちるばかりであります。

そこでSさんと共に味ひましたのが次の事でした。

「地獄は一定と知られた聖人が、吉水に六十九歳の法然上人をたづねられて、それまでに夢にも聞くことの出来ないものを聞きとられました。それが選択本願の念佛であります。即ち、こちらの思惑で、あゝだ、かうだとどんなに思ひかたあても、皆崩れ、碎けるのであります。この一切のはからひ、すべての思惑の駄目なことを知り抜かれて、その者のための「お粥の念佛」であり、如来廻向の念仏であり、それがそのまま彼の仏願に順する念佛であります」といふことでした。

最近Sさんは停年になり、職を退かれて、谷波の家に帰られました。然し、このSさんの念仏の生涯を聞くにつけ「果遂の誓、良に由有る哉」との聖人の金言を如実に拜見させて貰ひました。

さて斯様なSさんのことを申しますと、自分もSさんのやうに実行せねばならぬと、律法的に取られ易いのであります。五萬十萬と日夜に念仏を数多く称へることが大切

善導源信すすむとも 本師源空ひるめずば
片州獨世のともがらはし いかでか真宗をさとらまし
曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずば このたびむなしく過ぎなまし
の和讃で明かであります。

斯様に聖人は叡山の御生活で一心不乱に称名念佛して居られたのでありますけれど、一進一退、若存若亡の域を脱することが出来にならなかつたのであります。そして二十拾九歳、遂に「煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死を離ることあるべからざる身」と知られて、二十年の叡山での修学修行が皆空しくなられて、暗瞶として山を下られたのであります。

Sさんを迎へ

「念佛の一行。ことに称へ易く、たもち易い念佛の一行すらも、どんなに努めても、どんなに励んでも、自力作善の念佛、慢心虚仮の念佛、悪見の念佛を出られない身と知れては、地獄は一定すみ家、と申すほかはなく、聖人もその絶望の淵に立ち給うたのであります」

とお答へしたのであります。

諸善萬行の中、最善であり最高であると思ひ定めて、その称へ易く、たもち易い念佛に身心を集中して、昼夜朝暮なのではなく、一声の念仏も自力のはからひから金輪際出られない、さうした駄目さに氣附かれたことが、すでに果遂の誓の空しからざる姿でありまして、さうした駄目な身故の選択本願であり他力廻向の念仏とピタリと啗蓋、相應、機教相應のたのもしさが自然に知らされて参るのであります。

私共はむしろ念仏の申せぬ、どんなにとめても、どんなに励んでも、その下から消えて行く、取りおとして了ふ、虚做の念仏、自力の念仏の域を微塵も出られない身と知らされるにつけては、その念仏一ただに行じ得ぬ身を憐れと思し召す広大な御旨を仰ぎ「しかれば念仏も申され候」の御恵みを蒙るばかりであります。これ「ひとへに弥陀の御備にあづかる」念仏、非行非善の念仏であり、他力自然の念仏であります。

註。前回のあらまし。

参議ストロークには「それは随分ありさうなこと」といふ口癖があつた。そしてその口癖は、彼の生涯の浮沈、榮辱と密接な關係を有していた。彼自身も、私の今日あるは全くこの口癖のお蔭だとまで云つて、この言葉に甚深の価値をみとめてゐたので、一人息子のフリツツにもこの言葉を口癖になるまで言ひ馴らすやうにと真面目に勉めるが、「あなたがさうされるのはよいが、私が真似たのでは世のものわらひになるばかりですよ」と、仲々承服しないのであるが、参議は「少々笑はれても、得るところと失ふところをくらべて、余すところが大きいのだから、よいぢやないか」と懇々と説得につとめてゐる。

息子「何だつてそんなに仰つしやるんですか。お父さんの口癖ひいきといつたら、チトひどすぎると思ひます」

給であつた。が、因るなどといふ風を人に見せてはならなかつた。さうしないと信用も尊敬も享けられない——世の中はさうしたものさ——で、身形なども何時もきれいなサツパリと整へて、時にはすくなくからず金のかかる交際場裏にも出入した。それでも一文の借入金もなしで居たことは、当時の私の身分と年配では大出来と賞めていゝこつたんだ。

そんなわけで、表面は榮に見せかけてゐたが、内実はとても火の車、パンと塩と牛乳とが、三度々々の常食であつたとは、神ならずして誰が知らうぞ！。にもかかはらずわたしは大変幸福だつた。

わたしは致るところ好感を以て迎へられた。男達にも嫌はれず、女達にも好かれてゐた。男達の中にはわたしの無二の親友、弁護士のシユネーミユラーがゐた。彼とわたし、二人は一心同体であつた。彼はすでに学生当時、わたしのために殆ど一身を犠牲にしかけたことさへあつて、友としての信義を尽してくれた。

女達の中には、たつた一人、わたしの好きでたまらない人があつた。それはフイリピーネといつて、ファンチーテン將軍のお嬢さんで、わたしは彼女を、長いこと黙つて……無言の偶像崇拜といつてもいいぐらゐる恋してゐた無論誰一人その思ひを見てとるでなし、またわたしの方から打明けようとしなかつた」

参議「いやわたしは何もこの口癖に対して、お前に對するほどの愛着を感じてゐるんぢやないよ。だからわたしは望むのだ、このわたしの口癖を、そしてそれと一緒に、わたしの心の落着と、内実の幸福とを、お前に譲りたいとね。わたしの口癖が偶然に、何時の間にか、ひとりで出来たもんとは思ひなさんな！」

息子「一体それでは、何がお父さんに、そんな妙な癖をつかせせるやうにしたんですか？」

参議「わたしの若かつた時の、不幸と失望とがさ！わたしはただ、このケチな言葉につかまつて、やう／＼元立直つて、自分で自分を制することが出来たんだよ。

わしの父も母も、敬虔な立派な人だつたが、大した財産は遺してはくれなかつた。それでもお蔭で、大学時代を普通の学生なみに過して、卒業しても一二年は無収入でもどうにか暮して行けた。

やがて或定職にありついたが、その当座は例として無

息子「お父さん、その親友といふ方にも打明けなかつたんですか」

参議「さうとも、打明けるもんかね。それに女無しで、定職もない浪人、平市民の自分が、金持で、名門で、將軍を父に持つよなお嬢さんに恋したところで、追ひ付く話ぢやないんだからね！」

ところが稀代なことには、その親友の口から聞いた、噂話によると、わたしが彼女の意中の人だといふんだ。彼女はわたしに非常な熱情をもつて恋し、そのために母との間に時々いさかひさへ起つたといふことだ。

聞いただけでは本当と受取れなかつたが、その後半年目に偶然彼女と話す機会があつた時、そして雙方の秘密を打明けたとき、やつぱりうそではなかつたとわかつた。言ふまでもなく私達は永遠の愛と、もし愛に背かねばならぬ場合には、殉情の死とを盟つた。この時からわたしは天国にあつた。

いい時にはいいことの続くもので、その頃わたしは、さまざまの幸運からひつきりなしに見舞はれた。中にも目立つたのは太公大妃の執事の位地に就くことが出来て俸給などもマア／＼相当なものとなつたのと、今一つはバタバヤに移住して、そこで亡くなつた従兄から、大した遺産がごろがりこんで来たことで、わたしはその金のためではない、彼女のためにどんなに嬉しく思つたこと

か。

が、一つ困つたことは、折も折、或若い伯爵が彼女に求婚したことである。彼女はそれを小馬鹿にして気にもとめない様子であつたが、私が遺産受取りにバタバヤへ行くのは飽迄反対で、しばらくでも別れるのがつらいと彼女も云ひ、私もそれには賛成だつた。それは求婚してゐる伯爵は美貌で、金持で、おまけに押しへ強さうなのが気がかりだつたから、色々思案もし相談もした挙句、親友のシユネーミユラーが代理人となつて行つてくれることになつた。」

息子「お父さん、その親友のことを今まで一度もおくびにも仰言つたことはなかつたですね」

参議「さうかもしれないが、それはいまにひとりで解るよ。さて、彼が旅立つて幾週間がすぎた、それなのに何の音沙汰もない。私は心配のあまり、おつかけ、ひつかけ問ひ合せの手紙を出したが、何時まで待つても、うんともすんとも返事がない。」

私は思つた。ハハア病氣だな。死ぬが生きるかの重い病氣にかかつてるんだなと。とうとう友情が恋愛に打勝つた。別れのつらさを思ひ切つて私自身出掛けることにした。別れる時、彼女は気が遠くなつて倒たかかつたのを、あやぶく彼女の母の手に抱きとめられた。

私は行くさきさきで友人の消息をたづねた。何処の宿場にも彼の名は見出された。そして目的地で遺産を取り

たてたことも知れた。それから後の消息が知れない。私は種々調べたところ、アメリカ人の船に彼らしい風葉の男が、二月程前、即ち遺産を受取つて間もなく、乗り込んだということがわかつて吃驚した。そして「そんなことはあり得ない」と私は連呼したのであつたが、結局それに相違ないことが確められた。やつぱり「それは可能であつた」のであつた。

私の金蘭の友は、わたしをみごとだましたのである。」

息子「驚いたもんです、あきれたもんですね」

参議「私はやるせない憂愁に閉ざされて帰国の途についた。失はれた金のことは忘れられもしようが、莫逆の友が、わたしを裏切つた恨みはどうにもあきらめ切れなかつた。彼はわたしから人を信じ、頼む念といふものを根こそぎ奪つて了つた。」

道中無事に我が家の門に着いた時は、夕闇が深くたちこめて、夜のとばりがたれそめてゐた。そこへ出迎へてくれた宿の亭主に「何か変つたことはなかつたかね」とたづねたら「イエエ別段に。ただフアンチーテン將軍のお嬢さんが結婚なさつたのは御存じでせうね」との答へに、「何結婚したつて？」とわたしは叫んだ。

「馬鹿な！そんなことがあるものか！誰と？伯爵とだつて？馬鹿な？そんなことがあつてたまるもんか」と息巻くと「だつて、ほんとにさうなんだから仕方があ

りませんや」と亭主のこまごまと語るるところによると、いよく決定したのは、私がバタバヤから書いて出した親友の背信の通知が、將軍の手許に届いて間もないことであつたらしい。それでも私は、そんなことがあるものかと頑張つて一晩中亭主の言葉を信じようとしなかつたが、あくる日、各方面から、將軍自身の口からも矢張りさうだつたと確められた。

息子「これは怪しからん！言語同断だ！」

とフリッツは叫んで心臓の張り裂けるのを防がうとするかのやうに、胸へ手をやつた。

参議「さうだよ。わたしもさう叫んだもんだよ！。そんなわけで、あちらからも、こちらからも、さんざんにだまされて、わたしはもうこの世の中の何物にも信を置けなくなつた。」

どんな乙女の愛恋にも！ どんな男の契約にも！ どんな運命の當住にも！

私にはとてもありえないと思はれたことが、事実となつて現れたのである。今やわたしは、どんなありそもないと思はれることでも、あり得ると思へるやうになつた。だから人がわたしにむかつて、とてもありそもないことを言つても、わたしはそれに対して、さういふことは必ずしもないとは言へないでせう、と答へるのが私の口癖となつたのである。

この *Es ist sehr möglich* の四つの言葉の中に、わたしの生活智（人生観）の体系がすつかりおさまつてしまつたのである。

私はこの言葉を機会あるごとに繰返さうと決心した。わたしはこの言葉の中に、悲泣のどん底にあつて慰めを見出した。この言葉こそは私を絶望から救つてくれた。わたしは自分自身の外、他の何物もあてにしてはならぬことを知つた。このさき地上で、いつかまた嬉しいと思ふことがあるかしら、と時々私は思つてみた。すると「それは無いとは限らないよ」といふのが畳句であつて、そしてその通りに実証された。

それからといふものは、私はそれを後生大事に擲まへて離さずにある。いかなる幸運の恩寵も、もう私を酔はすことは出来なかつた。わたしはその無常と転変を思ひ浮べた。そして「それは随分可能である」とうなづいた。

参議はどう思つたか、息子フリッツの顔をしみじみと見つめながら、更に又次のやうに語り続けるのであつた。

参議「それからといふものは、フリッツ！ わたしはお前が生れた日ほど大きな喜びを感じたことは無かつたが、その時でさへお前が、ヒョット死の手に奪ひ取られまい

ものでもなし、或はまた、不良じみた子になるまいものでもなしと考慮して、たかぶる感激を調節し『それも随分可能である』と独り自らうなづいて、平静な気分になり、戻つて、萬一を覚悟したのであつた。

息子「それでもお父さんどちらも期待外れに終つて想像が事実にならなかつたのは仕合せでしたね！」

参議「イヤなに、そこんところはどつちがどうなつても構はないのさ。とに角當時にあつて、それは随分可能であつたんだ。いいかね、そこが肝要なんだ。

私が私の定文句をくりかへすやうになつてからは、わたしは欣快な時はすべてこれを天の賜と解し、しかも常住のものとは思はない。またどんな禍も私を驚かすことはない。前もつて覚悟は出来てゐるし、且つそれとても何時までも続くきづかひはない、やがてはやむにきまつたものと解つてゐるんだから。

要するに一切切切みな可能なんだ。だから私はお前に勧める。この觀念をわがものにささい！とね。

さうするには、これを常に適用して、お前の全本質の中に溶け込んで了はないといけない。いはばお前の全神経機構の中に、軟骨化して了はなくてはいけない。さうでなくては何の役にも立たないし、お前は何時までたつても特性の無い人間、醉生夢死で終らねばならない。

われ／＼人間は、事あるに臨んで、或態度に出ようと

となれば結構ぢやないか。それはその人に剛健性と持統性とを獲させる。だからわたしの言ふことをお聞き！お前にはそれが『それはありそなことである』といふ一句なんだ。

これでこの物語は終わりました。続まれるうちにお氣附きになられた方もあらうと思ひますが、この物語の骨子『ありそなこと』の六音と、『なむあみだぶ』の六音とを並べたり、置きかへたりしてみたらどんなものでせう。

実は今回すぐ引續いて、その試みやつてみる積りだつたんですが、都合でやめました。そこで皆様にお願ひ、かつお勧めする。私に代つて一つやつてみて下さい。

『ありそなこと』と『なむあみだぶ』、両者をぢつとみつけてみると、似てゐるところと、違つてゐるところが、遠く近く、濃く淡く、だん／＼はつきりと眼の底に映つてくる。春の野山のハイキングと一寸似たやうな感興を覚えしめる。百聞は一見にしかず、一つやつて御覧じませ。あなた方は『それは随分可能である』んです。

聖書誌、昭和十三年五月十日発行、転載。

するその刹那に、トツサに浮んで来て、時にはわれ／＼自身にも殆んど意識されもしない觀念に指導されるものだ。そしてその觀念といふのが、キヤツとひらめいて出て来るので、あとからは、どうしてあの大切な場合に、あははして、かうはしなかつたものか、自分で説明も出来ないのがつねである。

だからあつた場合には斯く／＼、かうした場合にはしかじかの態度に出ると、予言出来る人は極めてすくない。大方の人にはそれが出来なう。何故ならば、一旦凶事に面と向ふと、忽ち茫然自失、自分で自分をどうすることも出来なくなつて了ふからである。それはつまり、彼等の精神に、堅実性、がっちりした骨組ともいふべきものが缺けてゐるからである。崇高な生活智の強固な觀念、したたかな基督精神、現世的利福の蔑視、永遠の善なるもの、永遠の真なるものへの遠視、凡そこれらのものが缺けてゐるからである。

ところでこれらのもの、すなはち、心の支柱を实地に手に入れようとするにはどうしたらよいかといふと、その方法は極めて簡単である。といふのは外でもない、いづいかなるところへ持つて行つてもあてはめることの出来る格言を撰ぶのである。それが時たまうまく行かないことがあるにしてもかまやしないぢやないか。真実なるもの、崇高なるものが、その人の慣習、即ち第二の天性

清水凡禿居士遺詠

み光は無量無辺と聞くなれどはるけき胸は悲しかりけり

唯一つみ名を称入て強く行かん世の波風はよし荒くとも

念仏を唱ふる処に君ありと思へど淋し現し世のわれ

子等もなくはらからもなき身にしあれば法の友達有難き哉

みにされぬ者慕ひあひ唯涙、救ひのみ手のそこにありしか

進むとも追くもまた止まるもよし苦は去らじみ名称へかし

いまははや見られ知られし上なれば丸の裸になる要もなし

喜びも悲しみもただ融け合ふは念仏のみの世界なりけり

信するも頼むもいらす唯のただ六字のみ名に包まるるのみ

辞世

大願の舟はあはてる要もなしゆられるままに風のまに／＼

編集後記

残暑御見舞申し上げます。

八月六日は近角常音先生の三週忌に当り求道会館では先生を慕はれます有縁の同朋の自然の集ひも催されることであります。慈光誌上に吉田延世様の誦録を戴き、德音に浴し、涙一入にあらたなものがあります。

常観言

またやりそこなひ、またやりそこなひ、それだからおあきれない、お慈悲でないか。

常音書

の御遺墨は、私の全生命を貫ぬく金言として日夜に拝して居ります。

「常音先生随聞私記」の筆者吉田延世様は直方市新町一丁目に住まれ、波瀾の多い生涯ながら、書の教授をせられて晩年を送つて居られます。青俱森に生れられ、北海道

から東京にお移りになり、求道会館で、長年聞法せられました方でありませう。

「果登之誓良に由有る哉」とは聖人が三顧不入を告白せられるにつき、仏陀の念仏を信ぜしめずばおかじとの深き思し召しを感佩せられた御声であります。ゆくりなくもSさんの求道の姿にその尊い光を感じ、そのまま誌しました。

「ありそなこと」の池山先生の御原稿は、靜かにお読み頂けば、終生忘れられぬ味を残して下さると信じます。

「ありそなこと」も六音、「なむあみだぶ」も六音。と申されて、その交渉を一人一人に試みて下さいと結ばれてありますが、先生は当時「ありそなこと」とは「世を渡る念仏」だと申されました。私が三年近い大連の生活で「没法子」一語を学びましたと先生に申しましたら、それも満人の「世渡り念仏だね」と微笑して居られました。

聚墨生

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。日曜講話。一道会館。

市電、新郊通一丁目下車、東へ一丁。名鉄、呼続駅下車。徒歩約十分。

毎月廿四日、午前、午後。

法話会。昭和区小櫻町、教西寺

市電、御器所通下車。市バス、北山通下車
櫻花学園の東。

九月十三日、午前、午後

法話会。熱田区幡野町、願入寺

市電、八熊通り下車、西入ル、徒歩十分

定価 一部 十七円（送共）

半年 百四（送共）

一年 二百四（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二

印刷人 奥川 正生

名古屋市南区駄上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番